

## 第 72 回兵庫県広報コンクール 審査講評

## 【広報紙部門】

**審査員：荒川 克明（神戸新聞社 編集局 メディアセンター紙面 編集部 第二部長）**

これだけの広報紙を一堂に見比べる機会はありません。読み進めると、特集や企画を通して市民と「対話」を試みようとする自治体、必要な情報やお知らせの掲載に徹する自治体と、スタンスは分かります。後者でも広報紙としての役割は果たしていますが、紙面を通して市民とつながり、問題提起をしたりまちの課題や施策について考えたりする機会を設けられるのですから、そのツールを使わない手はないと思います。

今回の特集、市の部では、洲本市と小野市、朝来市の特集が印象に残りました。いずれも昨年、上位を占めた自治体です。グループホームを取り上げた洲本市はここ 2、3 年でつかんだ紙面イメージを踏襲し、主人公に据えた人物を通して障害者らの「自立のいま」を描きました。お仕着せで施策を紹介するのではなく、当事者の日常を見せることで伝え切る手法に感心します。小野市と朝来市はともに、ガーデニングと岩津ねぎという地元が大切にしてきた財産を歴史から紐解き、今の活動から今後の展望まで詳報しました。目を通した市民は、町に愛着と誇りを持つでしょう。当たり前だと思っている地域の財産を掘り下げ、あらためてまとめることで新たな気付きが芽生えるはずです。

町の部では、多可町と佐用町の紙面に引かれました。多可町は取材に手を抜かない姿勢が一貫しており、今回も自身が教室で授業を受けたような読後感でした。佐用町は町の存続にかかわる高校統廃合問題に正面から向き合いました。22年の姫新線特集と同様に大きな投げ掛けで、特集のテーマとしては全市町で一番だったと思います。

今年は阪神・淡路大震災から 30 年の節目となりました。審査に当たりながら当時、県外の仮設住宅で暮らす被災者たちが、毎月郵送で届く広報紙に故郷とのつながりを感じたと話していたのを思い出しました。ホームページの充実や SNS の浸透など広報を取り巻く環境は大きく変わりましたが、紙面にはデジタルにないぬくもりがあります。さまざまな情報を一覧で読めるメリットは今も負けていません。これからも行政と市民を結ぶ役割を意識して、「つながる仕掛けづくり」に工夫を凝らしていただきたいと思います。

**審査員：吉田 三千代（広報・編集アドバイザー）**

本年は市と町あわせて 29 件の応募がありました。特集で扱われたテーマとして多かったものは「地域の魅力発信」が 6 市、「教育」が 5 市町でした。これらに限らずいずれのテーマにおいても、地域の強みや課題に迫った、充実した内容が発信されていました。

特に印象に残った市町について講評をお伝えします。

「広報 すもと」が相変わらず安定した力を発揮していました。グループホームを取り上げた特集は、表紙から中面 6 ページまで、写真、文章の視点が定まっております。読むうちに包み込まれるような感覚になりました。余白の使い方も絶妙で、声高ではなく、淡々と伝える姿勢が心地よく沁みってくるようでした。NIMBY (Not In My Back Yard: 我が家の裏庭にはお断り) と言われがちな施設を誠実な目線で、市からの発信として伝える意義は大きいと感じました。

「だいすき! taka」も精力的な取材で、臨場感あふれる小学校教育の現場を伝えていました。子どもたちのはじけるようなコメントの数々から、そして先生方のパッションと好奇心から、未来を照らす光を受け取った方は多かったのではないのでしょうか。やや冗長に

なっているところはあるものの、ポジティブ要素がこぼれるほど伝わってくる特集でした。

表紙からのドライブ感が素晴らしかったのは、「広報朝来」「市報あまがさき」です。朝来市は特産品のねぎをフィーチャーし、素晴らしいエネルギーに満ちた表紙から力強い流れを生み出していました。尼崎市は限られた誌面を走り抜けるようにデザインし、ユースのパワーがみなぎる特集にまとめていました。

新しさを感じたのが、「広報 あしや」です。表紙で、市民のごみ削減協力に対して「ありがとうございます」と伝えており、目を開かれた思いがしました。あれをしてください、これはしないでくださいという“お願い広報”になりがちなごみ問題で、市から感謝を伝えるというのは、今後の協力持続においても有効な方法でしょう。広報紙の手法はまだまだ開拓できると思わせる、秀でた紙面でした。

ひとつ、各自治体の広報ご担当の方々に、今一度注意を向けていただきたいのが、「誰もが読みやすい紙面かどうか」という点です。一瞥して、読みにくい（読むのが面倒）と思われぬ事がとても大事なのです。読みにくさで減点せざるを得なかった作品も多数ありました。とても良い切り口で内容も素晴らしかったのに残念でなりません。

情報過多が極まる時代、ほんの少しの欠点でも受け手はその情報を遠ざけてしまいます。色遣い、フォント、文字の太さ・大きさ、写真の色味など、必ず多くの目でチェックされることをお勧めします。カラーユニバーサルデザインのサイト（フォントメーカーや印刷会社のものなど多数あり）を参考に、識別可能な状態で送り出されるとよいと思います。自治体の広報誌ということからも、ユニバーサルという視点は重要です。

人口減少社会が進行し、どの自治体もご苦労があることと思います。社会も変容し、紙の媒体の存在価値も問われ続けることでしょう。そんな中であっても、地元の当事者としての疑問や関心を大切に、自治体に住む方々に響く発信を続けていただきたいと願ってやみません。手元に置いておける広報誌ならではの力を信じて、これからも頑張ってください！

### **審査員：有田 佳浩（兵庫県広報プロデューサー）**

全体講評として、今回改めて感じたことごとを2点書かせていただきます。

広報誌（紙）の在り方は、それぞれの地域によって様々だと思います。その地域の課題、社会基盤、人口とその年齢構成…そしてコスト。いろいろなものを受け止めながら、発行されています。在り方は、役割と言ってもいいかもしれません。単なる紙媒体の「作品」ではなく、上記のようなものを受け止めて存在しているということ。そんなことを感じながら審査させていただきました。

一般的に、これまでのコンクールを見る限り、郊外（人口の少ない）市町の広報誌（紙）が選ばれる傾向にあります。逆に人口の多いの市は難しい。それは、伝えるべき情報が大量にあり、いわゆるエモーショナルな部分「特集」に時間とエネルギー、そしてページ数を割けないのが理由かもしれません。どうすればそれは打破できるのか。現時点で私自身にも答えはありません。ぜひ、これらの市のみなさんと一緒に考え続けたいと思います。

もうひとつは、広報誌（紙）の作り方が近隣地域で伝播しているということ。例えば、北播磨地域。少し前に3年連続最優秀に輝いた小野市をはじめとして近隣の市町が年々メディアとしてのクオリティを上げています。そして、こちらも同じく3年連続最優秀の洲本市の近隣地域も然り。地域の実情にあった独特な雰囲気を出しています。この伝播する力は何なのか。各地域で広報誌（紙）を担当する方々の交流があることは伺ったことがあります。やはり広報誌（紙）制作に向ける熱意なのではないでしょうか。

紙媒体の存在が疑問視される傾向にある現在、改めてその役割を捉え直し、地域の実情に合った効果的なものを作り上げる、人事異動がある中その考えとスキルを伝承する。素敵なことだと思えます。

### （特選受賞作品）

#### ○市の部：洲本市 「広報すもと 11月号」

肉声が聞こえてくる特集。ここ2、3年で確立した「洲本市スタイル」を踏襲しており、特定の登場人物と生い立ち、それを支える人たちという構成で全体を語らせる手法は完成されている。なんとも言えない「優しさ」を感じる雰囲気は、他ではなかなか真似ができないところまでたどり着いたように感じる。表紙のグループホームに招き入れるかのような写真も素晴らしい。

#### ○町の部：多可町 「広報たか『だいずき taka』 12月号」

篠原先生の教室に入りこんだような臨場感あふれる特集で、紙面を通して多可町の教育現場をじっくり見せてもらった印象。表紙から特集全編に子どもたちの声が響き渡り、取材者もその場の磁力に引き寄せられたことと思う。最後に表紙へと帰結する仕掛けは、広報紙のクオリティを超えている。

## 【広報写真部門】

### 審査員：山崎 竜（神戸新聞社 編集局 映像写真部長）

今年の作品は全体的に甲乙付けがたく、選考に苦労しました。それでも、写真で目を引きたい、テーマに合った写真を撮りたい、という広報員のみなさんの熱意のようなものを感じ取ることができました。

1枚写真では、小野市の作品が選ばれました。野菜摂取量が足りない、というテーマの硬さを、野菜を収穫する子どもたちの楽しげな表情で和らげることに成功しています。小見出しとの相乗効果もあって、読者に楽しく次のページをめくらせることができたのではないのでしょうか。

組み写真は、子供が恐れていた獅子を受け入れるまでの心の動きがマンガのようなコマ割りで表現された多可町の作品が特選に選ばれました。当初、最後の1枚だけにするつもりだったようですが、時系列に並べることで見事にひとつの物語に昇華しました。

全体を通して見ますと、組み写真で夏祭りが非常に多かったように思います。そしてこうなりがちだな、というような横並びの印象を受けました。多くの市民、町民を紹介したい、花火も入れたい、というのは分かるのですが、全体的に写真が小さく、メリハリも少なくなるのは否めません。「要素を捨てる勇氣」もぜひ持って頂きたいものです。夏祭りに限らず、イベントを紹介するときには往々にしてこうした傾向が強いと思われます。

また、1枚写真では洲本市の表紙の金魚すくいの子供の写真に心奪われましたが、こちらはエントリー作品ではなく、選ぶことができませんでした。非常にもったいないなと感じました。コンテストにおいては、撮る、編集する以外にも何で勝負するか、というところも大事なポイントです。

### 審査員：桂 知秋（兵庫県メディアディレクター）

今回一枚写真の部で特選に選ばれた小野市の写真は、保育園児たちが自分たちの育てた

野菜を持ってはしゃいでいる姿。おどけてジャガイモを目にあてた姿が印象的ですが、子どもたちがこれだけリラックスして自然体でいられるのは、撮影者が子どもたちとコミュニケーションをとり、信頼してもらえたからこそだと思います。食生活改善の特集へつなげる表紙だったそうですが、「野菜を食べよう」というメッセージを打ち出すのではなく、そこからいったん離れて、生き生きとした子どもならではの姿の写真と「目が飛び出ちゃった」と添えられたセリフで、市民のみなさんも微笑ましい気持ちで特集ページに進まれたのではないのでしょうか。

組み写真部門では多可町の秋祭りの獅子と子どもの三連の組み写真が目を惹きました。お祭りに出てくる獅子といえば、勇ましい姿か、もしくはそれを怖がっている子どもの写真はよく見かけますが、二人がだんだん打ち解けていくストーリーを三枚で組むことにより見事に表現していました。地元で恒例のお祭りもこんなふうに取り切られることで、地域のみなさんも新鮮な印象があったのではないかと想像します。

今年もたくさん素敵な写真が寄せられました。その背景には担当職員の方々がいかに地域の日常の瞬間を切り取るために、日々地域を走り回っていらっしゃるかがよく伝わります。その中でも、統合前の最後の体育大会をバトンを渡す絶妙な表情と淡いトーンで表現した加東市や、平和のテーマで多様な視点の写真をコラージュで表現した芦屋市など、今回はテーマに沿った「らしさ」や「こうあるべき」に捉われないみずみずしい視点が非常に印象に残りました。担当者のそういった視点が地域のみなさんの新しい発見や気持ちを生み出したであろうと考えると、広報写真としても価値のあることだと思います。

#### **(特選受賞作品)**

#### **○一枚写真の部：小野市 「広報おの『Ono Press』9月号」表紙**

子どもたちの仕草や楽しげな表情がすべて。撮り手が被写体としっかりとコミュニケーションを取り受け入れてもらった後、今度は空気のように存在を消すというプロセスがあったように思われる。子ども、野菜、青空と、ある種定番の素材と構図だが、子どもたちのはしゃぐ姿をメインに持ってきたことで目を惹く紙面になっている。市が伝えたいメッセージやセリフではなく、あえて子どもの生の声をセリフにしておいたのも好感が持てる。

#### **○組み写真の部：多可町 「広報たか『だいすき taka』11月号」表紙**

子供の心の動き、成長のようなものを、3枚の写真を使いマンガのように並べることで表現している。秋祭りの主役である獅子ではなく、子どもに焦点があっていることや、写真のやわらかいトーンからも、担当者の想いを感じる。秋祭りという被写体の多い行事の中、あえてここだけに要素を絞って勝負したことで、独自の世界が広がった。

### **【映像部門】**

#### **審査員：清水 理恵子（元兵庫県広報専門員・フリーアナウンサー）**

近年 SNS が多様化し、映像の表現方法についても多岐に渡るようになりました。審査会に寄せられた作品においても様々なジャンル、長尺から1分に満たない物まで多種多様に渡っておりましてので、見応えを感じつつ審査には頭を悩ませました。

今回私の審査ポイントは、アナウンサーと言う視点から以下を重点的に拝見しました。まずは「映像から伝わる制作者の熱量」です。特にドキュメンタリー作品は、取材対象者とどれだけ距離感を縮められるかが肝になります。良い表情、心の内に触れるコメント等は、取材を重ね信頼感を構築した上で得られるものです。佐用町「87才のカメラマン 第

2の人生は70才から」の冒頭のセリフはまさにその賜物ではないのかなと感じました。加えて、これは全体的に言えるのですが、撮影や取材の思い入れが強くなる程、編集時に思い切ったカットが出来なくなっている傾向があるなど見受けられました。その結果、仕上がりが間延びした印象になってしまっていた作品がいくつかあり、とても勿体なく感じました。編集作業は難しい判断の連続ではありますが「取材時の近い距離感から第三者的視点への切り替え」「視聴者の想像力をより掻き立てるための素材選びやカット割りの工夫」ができれば、より視聴者に“伝わる”作品に仕上がると思います。

また、昨今のAI技術の進歩で原稿作成やナレーションまで出来るようになってきてきました。制作費を押さえる為に活用するのも一つの手段ではありますが、人が伝える温度感に勝るものはないと思っておりますし、一般の方のナレーションには私たちプロには出せない親近感や味があります。デジタル全盛の世になってきましたが逆手に取ったアナログさが生む親近感も是非多大に活用して貰いたいと強く感じました。

ここまで色々とお伝えしてきましたが、皆さんの映像制作スキルのレベルの高さにはとても驚きました。これからも素敵な作品にお目に掛かれる事を楽しみにしています。

### **審査員：山本 剛大（日本放送協会 神戸放送局 コンテンツセンター センター長）**

自治体の皆さまが懸命に取り組まれた幅広い作品をどう評価するか、難しい審査でした。SNSでコンパクトに伝えるなど新しい手法もあり、従来の映像作品の“文法”がどこまで通用するか不安もありましたが、「伝わる作品かどうか」という点を重視しました。つまり、「誰を対象に」「何のねらいで」「何を伝えるか」という基本要素の仕上がりに注目して検討しました。

取材・撮影をすると、その対象のために映像をまとめようとしがちですが、広報作品はあくまでも見る人のために作る必要があると思います。基本的な情報を知らない人にも関心を持ってもらい、理解し行動につなげてもらうための工夫が必要です。今回の入賞作品でも、もうひと工夫すればよりよくなると感じる点がありました。小野市の「小野まつり」は躍動的な映像をコンパクトにまとめ、魅力を十分に伝えていますが、祭りを知らない人にもアピールするならば、構成を邪魔しない程度に基本情報がほしいと思いました。また、広角の映像だけでなく表情のアップなども入れるとさらに力強くなったと思います。多可町の「手話ダンスサークル」は感動的な作りですが、サークルや活動、公演がどのようなのか、説明の要素を多少でも盛り込むと理解しやすいと思います。南あわじ市の「声の広報」は皆さんの熱意が伝わってきますが、利用促進を目指すのか、サークルを紹介するのか、ボランティアを募集するのか、峻別して構成すると伝わりやすいと思いました。長いインタビューはなかなか耳に入らないことが多く、ねらいと構成を定めてコンパクトに編集するとなおいいと感じました。

「何を伝えるか」という要素を見定めるのも大切です。アピールしたいこと、強調したい点を見だし、コメントでさらっとなぞるだけでなくしっかりとシーン化します。西脇市の「播州織産地博覧会」は丁寧にインタビューを撮って楽しさが伝わってきますが、例えば、産地そのものの展示でどんなことを体験・見学できるかなどの具体例を掘り下げると、ほかとの差別化が図れると思います。佐用町の「87才のカメラマン」はいきいきとした魅力的な方に焦点を当て、見ているほうが励まされる気がしました。主人公の方がなぜこれほど前向きに取り組んでいらっしゃるか、できれば構成を整理してまとめ、見た人が今後の参考にできるよう編集するといいでしょ。

誰に何を伝えるかを見定める。構成をしっかりと検討し、章立てを考える。見る人が「見たい」「知りたい」と感じる欲求に応える。伝えたいことを伝えるため、不要なものは落とす。気持ちが動かされたことを表現する場合はその理由となった事実を伝える――。制作過程でこうした点を意識しながら、できれば、初見の人も含めて試写を繰り返し、修正を

重ねるとブラッシュアップできると思います。

私も大変勉強させていただきました。これからも、兵庫県内各地の魅力を内外に発信し、新たな“ファン”の獲得につなげていただければと願っています。

**（特選受賞作品）**

**○中央市 「歴史小説『風奔る』～物語の生まれた風景をたずねて～」**

地域に刻まれた歴史を紐解き、そこに住む人、今を生きる人にロマンを感じさせる力作。著者である春名氏の講演会を軸に、難しい歴史背景を朗読・ナレーション・ドローン等を効果的に織り交ぜながら展開し、視聴者をどんどん世界観に引き込んでいく構成が素晴らしい。講演の様子だけでなくしっかりと掘り下げてシーン化しているので、興味を絶やさず見ることができた。「敗者が残した物語」とその舞台の魅力が伝わってきた。